

INTERVIEW：インタビュー



高校生写真家 千葉拓人さん

今月号のインタビューの千葉拓人さんは、現役高校生のカメラマンです。

千葉さんは、中学生のときに宮城県の石巻で東日本大震災を経験され、震災の現場と震災のその後を多くの方に知っていただくために、日本各地で「ツタエル」という企画名で写真展を開催されています。当会でも、2014年7月14日より7月30日まで、会館の1F等で展示をしておりましたので、ご覧になった会員も多いかと思います。

千葉さんは、今日も、愛用機のEOSの7Dと、5DのMark IIIで、東北の様々な風景を切り取っておられることと思います。そんな千葉さんに、カメラのことから震災のことまで色々とお話をうかがって参りました。
(聞き手・構成：西岡 毅)

— 幼稚園のときに初めてカメラを手にされたとお聞きしました。

年少か年中のときに祖父からEOS Kissのフィルムカメラを持たされ、撮影していました。小学生のときに祖父からライカのM4という機種を譲り受けました。

— 高級品ですね。でも、M4は露出の設定等が子どもには難しかったんじゃないですか。

現像やプリントは全部写真屋さんをお願いしていましたが、露出計も使わずに自分の感覚でやっていたので、失敗が多くて、というか、失敗が多すぎて(笑)。

— フィルムカメラとデジタルカメラは、何か違いますか。

フィルムと比べるとデジタルは枚数を気にせず撮れるので、そこが一番違いますね。フィルムの場合は例えば24枚とか、36枚とか撮影枚数に制限がありますね。それに、フィルムの現像代も高かったりするので(笑)。

— しかも、現像に出して返ってくるまで、きちんと撮れているかどうか分からないですね。カメラはどなたかに教わったりしたんでしょうか。

カメラ技術を教わったりしたことではないですけど、自分の卒業アルバムを担当してもらった地元の写真館

のカメラマンさんがおられて、とりあえずはその方を目標にしようと思って今までやってきました。

— 今回、展覧会を拝見させていただいて、個人的に一番印象的だったのが「夏の終わり」というヒマワリのお写真です(*表紙裏にカラー写真を掲載)。あのお写真はちょっと露出をアンダー気味で撮ってという狙いでやっていらっしゃると思うんですけど(*露出アンダーで撮影すると暗い感じの画面になります)、そういった技法も独学なんですか。

はい、全て独学ですね。カメラをいじっている間にいじり方とか、操作の仕方を少しずつ覚えていきました。

— 展覧会にはカラー写真とモノクロ写真がありますが、カラーとモノクロの撮り分けはどのようにされていますか。

メッセージ性の強いものはモノクロで撮っています。モノクロの方が情報量は少ないんですが、強い印象を与えることができると思っています。

— なるほど。千葉さんは、好きな写真のジャンルはありますか。

風景も好きなんですけど、最近は、グラビアが面白いと思います。

— 実際にグラビア撮影をおやりになったことはありますか。
撮影経験はないです。今までは風景しか撮ってなかったんですけど、だんだん人に興味が出てきて。

— 実際に誰を撮りたいですか。

『サマーレスキュー』というドラマに出ていらっしゃる尾野真千子さんとか撮ってみたいです。美しい方です。

— それでは、今回、弁護士会館での写真展、「ツタエル」展のきっかけとなった東日本大震災についてお聞きしたいと思います。まず、震災当日のことを教えてください。

僕は15歳で、丁度、中学校の卒業式の日でした。

— 卒業式ということで、皆さんで友達と羽を伸ばそうと、そういうときですよ。

はい。友人とカラオケボックスに入ってすぐに揺れてきて、最初はそれほどでもなかったんですけど、「何かいつもより揺れが長くない？」って、友人としゃべり始めたあたりで、もうとんでもない揺れに変わって。これは今までの地震とは全然違うものだと思います。

— その後はどうされましたか。

友人の1人が携帯を持っていましたが、全然つながらなくて。それで、やっとメールが1回だけ通じて、友人の家族が迎えに来るといって話になって、40～50分ぐらいで迎えに来てもらいました。そのとき、車の渋滞をすり抜けながら逃げる途中で、北上川を津波が逆流というか、遡ってきているのを見えました。

— 千葉さんは、すぐに家族と連絡がとれましたか。

友人の家から父に電話がつながって、その後、自宅へ戻りました。初日はそんな感じですね。なんとか無事に家族全員がそろいました。

— ご自宅では、津波の心配はされましたか。

自宅は海岸からはそこそこ距離があって、なおかつ家は山の上にあるので津波の心配はしなかったんです。でも海岸から僕の家まで車で15分以上かかる距離なのに、家の2キロ手前まで津波が来ていましたから、相当なものですよ。

— 津波の被害の内容は、震災当日はニュースで確認もできなかったですか。

そもそも停電だったのでテレビがつかず、情報が何も入りませんでした。でも、初日の夜、寝る前に父と一緒に山の上に登ったら、石巻全体がオレンジ色に光るような感じでした。街全体停電なのに、火事で石巻の海岸沿いが燃えているのと、七ヶ浜の火力発電所、そこは何十キロと離れているんですけど、そっちもオレンジ色に光っているのが見えて、すごい光景でした。

— 千葉さんは、震災のときから、震災の状況を写真に収めていらっしゃいましたよね。でも、あるときにそれを全部消してしまったとお聞きしました。そのきっかけについて、教えてください。

僕の撮り方も悪かったんですけど、家の基礎部分だけになっている家の前で泣いている親子を撮ったときに、近くにいた男性に「撮ってどうするんだ！」と言われてしまった。

— 知らない方ですか。

そうです。怒鳴り散らされて、その場ではどうしていいか分からなくなって逃げたんですけど、でも家に戻った後に、「自分、写真撮ってどうするんだろう」と考えて、答えを見い出すことができなかった。それでいろいろな感情があって、何かその親子に対する申し訳なさとか、「自分、何をやっているんだろうな」みたいな悔しさとか、そういうものがいろいろあって、その日に、それまで撮っていた震災の写真全部をほかりました。

— ほかるというのは？

捨てるということです。写真のデータをPCのゴミ箱に入れて、ゴミ箱を空にして、完全に消去しました。ちなみに、これだとサルベージ（*消去したデータの復元のこと）できるじゃないかと言われるんですけど、2011年12月にあった余震で、パソコンが床に落ちて完全に壊れたので、復元もできなくなってしまいました。ちょっともったいないことをしたなど、今は悔やみますけど。

— その時点で何枚ぐらい写真を撮っていらしたんですか。

何枚だろう。容量が200ギガを超えていたので、

たぶん3万枚以上だと思います。

— 消してしまうまでの撮影期間はどれくらいでしたか。
2カ月くらいです。

— 震災直後のその時期に撮っていた写真はどのような写真が多いんですかね。というのは、今、展覧会を拝見すると、子どもたちの笑顔とか、花とか、復興に向けた写真という感じがするんですが。

震災直後の写真は、家に船や車が突っ込んだような写真、遺体安置場の写真なんかが多かったです。メッセージ性が強いと言えば聞こえはいいですけど、過激な写真がすごく多かったと思います。

— そうやって結局写真をいったん消してしまって、その後、もう1回撮ろうと思うまで、どれくらい時間がかかりましたか。
悩んでいたわりにはすごく回復が早くて、1〜2週間だと思います。

— 撮影再開のきっかけはありましたか。
僕は、がれきの撤去とかのボランティアもしていたんですけど、偶然、神戸から来た男性と同じ班になって、僕が怒鳴られて写真を消したんだという話をしたときに、そんなに間違ったことをしていないんじゃないかなという話をしてもらったんです。神戸の震災を経験した人から、写真とか映像の記録を残すことの大切さを話してもらって、それじゃあ、また撮ろうと思いはじめることができました。

— 写真撮影を再開して、注意したことはありますか。
撮影をさせてもらう側として、写真を撮らせてくれた人に対して配慮というか、心遣い、気遣いをしたりとか、そういうことは意識するようになりました。

— その後、撮り溜めた写真が今回の企画「ツタエル」につながったきっかけは何ですか。

最初のきっかけは、2012年の3月11日に「石巻日日こども新聞」という新聞の創刊のときに、声をかけていただいたことですね。3カ月に1回、年4回発行されています。それで、その新聞の取材に行ったり、取材

の写真を撮ったりしていました。そうしたところ、何かの拍子に石巻で写真展をやりたいという話になって。それで、新聞記者として活動してきたから、じゃあ、情報の発信ということで「ツタエル」企画にしようという流れです。

— 企画名は千葉さんの命名ですか。
はい。最初は、漢字の「伝える」というタイトルだったんですけど、何か味気ないねというので片仮名にしたら、何かちょっとしっくりくるというか、片仮名にすることによって想像する余地というか、いろいろなことを思うことができるんじゃないかと。

— そうやって「ツタエル」企画として、2013年の10月、石巻での写真の個展では何枚発表されたんですか。
スペースの都合で9枚でした。

— 何枚から選んでの9枚ですか。
たぶん8万枚とか、9万枚とか、それぐらいだったと思います。

— ご自身で全部選ぶんですか。
そうです。1日何時間も選ぶ作業をやって、全部確認し終わるのに8日かかっています。

— その後、日本各地でも写真展をされていますね。
埼玉県の川口、秋田県の秋田市、そして、東京都の神田ですね。ありがたいことに、石巻でやったときに遠方から来た方が、関東でやってみないかと声をかけてくださいました。

— 今回の当会での「ツタエル」企画のきっかけは、その神田の写真展のときですか。
東京弁護士会の小野田峻弁護士が、神田の写真展をご覧になって、声をかけてくれたのがきっかけです。

— 写真展の今後はいかがですか。
ほかの地域のいろいろな人に見てもらいたいという思いはありますが、あんまり欲を出すとよくないかなとも思いながら。なので、謙虚に、取りあえず次に、

ツタエル

東日本大震災を伝える高校生
千葉拓人 写真展

企画名は最初、漢字の「伝える」だったんですけど、片仮名にしたら何かしっくりくる。想像する余地というか、いろいろなことを思うことができるんじゃないかと。

千葉拓人



9月に京都府での写真展が決まっているので、その成功が目標です（*本インタビューは2014年7月30日に行った。写真展は無事終了した）。

— 千葉さんの進路はいかがでしょうか。

高校の卒業が来年予定で、その後は、写真の専門学校には行こうと思っています。

— 今回、企画で弁護士にもお会いになったと思うんですけど、それまで、弁護士というどのようなイメージがありましたか。

『リーガル・ハイ』の古美門^{こみかど}弁護士（*フジテレビ系列のドラマ。古美門弁護士は、堺雅人さん演じる敏腕弁護士のイメージですね（笑））。

— なるほど（笑）。そのドラマには新垣結衣さんも弁護士役で出ていますね。新垣さんみたいな弁護士もいると思っただけじゃなかったか。

いてほしいなどは思いますね（笑）。いないですか？

— いると思います（笑）。今回の企画で、たくさんの弁護士にお会いになったと思うんですけど、実際、お会いになってみていかがでしたか。

お会いする前は、弁護士の方って、何かこう、利益追求がすごいような人達なんじゃないかと思ったんで

すけど、今回、「ツタエル」企画でかかわったような先生方は、すごく僕の思っていた弁護士とはまた全然違って、フランクというか、柔らかい方たちでした。

— さっきの松田弁護士は東京弁護士会の現副会長ですが、お茶をついで肩をもんでいかれましたね（笑）。

本当にもう頭が上がらないです。

— 弁護士会のイメージという、いかがでしたか。

とりあえず弁護士さんたちが集まっている団体というくらいの認識でした。すみません。ちょっと予備知識がなくて。

— いえいえ、とんでもありません。これからは、弁護士会ももっと工夫して広報にも力を入れていきたいと思っているところなので、例えば、お写真のことでお力添えをお願いすることもあるかと思いますが、そのときは是非よろしく願いいたします。

はい、よろしく願いいたします。

プロフィール ちば・ひろと

1995年生まれ。中学3年生の時に宮城県石巻市で東日本大震災を経験。震災の記憶と教訓を伝える使命を感じ写真を撮り続ける。その数は10万枚を超えた。石巻地域の子供たちによる情報発信活動「石巻日日こども新聞」創刊（2012年3月）から記者として活動。第4回国際防災グローバルプラットフォーム（2013年5月、スイス・ジュネーブにて開催）には宮城県の高校生を代表して参加するなど、震災の経験と学びを発信する活動を行っている。